

港のたより



(一社) 寒地港湾技術研究センター
COLD REGION PORT AND HARBOR ENGINEERING RESEARCH CENTER



十勝港 南洋材の陸揚作業 (提供: 帯広開発建設部)

Contents

行事報告

- 第2回 CPC 講演会の開催について「シビルエンジニア廣井勇の残したもの
— 廣井勇工学博士研究成果を中心に —」 ②
- ザ・シンポジウムみなと in 札幌 ③

港湾ニュース

- 香深港耐震強化岸壁の完成について ④
- 第4回小樽港フィールド・ラーニングの開催について ⑤
- 第11回「みなと座談会」の開催 ⑥
- 「北海道海洋深層水フェア」の開催について ⑥
- 「港湾空港技術特別講演会 in 札幌2014」の開催について ⑦
- 平成26年度国土交通省「国土技術研究会」について ⑧
- みなと講演会(紋別)開催のご報告 ⑨

シリーズ

- 地域での「みなとオアシス」の取り組みについて vol. 2 ⑪

センター通信

- 当センター常任委員会委員長 藤田幸洋氏が国土交通省建設事業等関係者大臣表彰
海洋・港湾構造物維持管理士会第7回講演会の開催について ⑮

- 津波漂流物対策施設設計ガイドライン講習会の開催について ⑮
- 「第3回 CPC 交流セミナー」を開催 ⑮
- 第1回広報委員会の開催について ⑰
- メールアドレス登録へのご協力をお願い ⑰

お知らせ

- 「第4回 CPC 交流セミナー」開催のご案内(予告) ⑱

vol. 111
2014.12.25

行事報告

第2回CPC講演会の開催について

「シビルエンジニア廣井勇の残したもの

—廣井勇工学博士研究成果を中心に—

一般社団法人寒地港湾技術研究センター

平成26年9月29日（月）午後2時30分から、北海道立道民活動センター（かでの2・7）の「かでのホール」において、廣井勇工学博士研究会との共催により、第2回CPC講演会「シビルエンジニア廣井勇の残したもの—廣井勇工学博士研究成果を中心に—」が、全道の各地から約200名の出席により開催されました。はじめに、主催者代表として廣井勇工学博士研究会会員の前国土交通省中国地方整備局長栗田悟氏からご挨拶があり、研究会の設立経緯及び活動の内容等についてご挨拶がありました。

第I部は、北海道大学名誉教授で前北海道大学総長の佐伯浩氏（当センター会長）から「シビルエンジニア廣井勇を育てた札幌農学校を受け継いで」と題し、廣井勇を育てた札幌農学校の教育が今北海道大学で

のように生きているか、どのようなことを参考にしているか等についてご講演いただきました。

第II部は、廣井勇工学博士研究会の成果報告として、研究会を代表し7名の会員からその成果についてご報告いただきました。限られた時間制約の中で1報告15分という短い報告時間ではありましたが、各報告者の熱意あふれる報告に参加者も聞き逃すまいと熱心に聴講され、満場の拍手で講演会が終了しました。

最後に、何かとお忙しい中、快くご講演いただきました佐伯浩氏、廣井勇工学博士研究会会員の7名の方々とともに、多数ご参加いただきました皆様に、紙面を借りてお礼を申し上げます。なお、本講演の詳細につきましては、来年発行の機関誌「海と港」33号に掲載する予定です。

廣井勇工学博士研究会成果報告内容と講師の方々（発表順）

- ・「廣井勇の業績（研究会成果の総括）」 日本データサービス(株)副社長 関口信一郎 氏
- ・「砂浜海岸の築港に及ぼす漂砂の特性について」 北日本港湾コンサルタント(株) 代表取締役 上原 泰正 氏
- ・「波動力の測定と其利用」 (一社) 寒地港湾技術研究センター 理事長 水野 雄三 氏
- ・「将来の港湾（会長講演）」 九州大学大学院 工学研究院 教授 平澤 充成 氏
- ・論説報告「上海港」、雑録「上海港改良技術會議に就いて」 (一財) 港湾空港総合技術センター 研究主幹 梅沢 信敏 氏
- ・「小樽港コンクリート長期耐久試験」 国土交通省 北海道開発局 港湾空港部長 川合 紀章 氏
- ・「小樽北防波堤の建設とその後の経緯について」 (株)西村組 執行役員常務 中村 弘之 氏



講演 佐伯 浩氏



報告 川合紀章氏



全体風景

ザ・シンポジウムみなと in 札幌

一般社団法人寒地港湾技術研究センター

「ザ・シンポジウムみなと」は、地域の発展の核となる港湾について、様々な立場から見た北海道港湾の将来の方向に関する意見を紹介していただき、道民の方々に港湾の重要性や必要性を理解してもらうとともに、広く港湾をPRすることを目的としてこれまで道内主要港湾所在地において開催してきました。平成26年度の「ザ・シンポジウムみなと」は、北海道の魅力ある自然環境等の観光資源を生かして、寄港隻数が年々伸びているクルーズ観光をテーマに、北海道の港湾や地域における取り組み戦略を考えると、11月20日（木）札幌市（札幌全日空ホテル）において、全道各地から約250名の方々が参加し開催されました。

はじめに、主催者として「ザ・シンポジウムみなと実行委員会」の水野委員長からご挨拶がありました。



開会挨拶 水野委員長

基調講演は、(株)カーニバル・ジャパン 代表取締役の木島榮子氏が「プリンセス・クルーズから見た今後のクルーズ振興」と題して、米国プリンセスクルーズ社の戦略や、本年実施した北海道一周クルーズの実績等をご紹介いただき、北海道の強みや課題を踏まえた今後のクルーズ振興への助言等についてご講演いただきました。



基調講演 木島榮子氏

休憩を挟んだ後のパネルディスカッションでは、室蘭工業大学 地域共同研究開発センター 准教授の古屋温美氏がコーディネーターを務め、パネリストとして網走市長の水谷 洋一氏、釧路港おもてなし倶楽部

副実行委員長の金子ゆかり氏、富山県土木部港湾課 環日本海拠点港推進班班長の太田浩男氏、大阪大学大学院 国際公共政策研究科教授の赤井伸郎氏、(株)海事プレス社横浜支局長の齊藤正幸氏の6名の方が参加され、「北海道のみなと・地域のクルーズ振興戦略を考える」をテーマに討論がなされました。



パネルディスカッション

それぞれのお立場から、水谷市長からは「今年のプリンセスクルーズ等寄港の成果と今後の取組戦略について」、金子委員長からは「今年のプリンセスクルーズ等寄港への対応と今後の取組について」、太田班長からは「環日本海クルーズ推進協議会での北海道との連携戦略等について」、赤井教授からは「クルーズ船寄港による地域活性化の戦略について」、赤井教授からは「クルーズ船寄港による地域活性化の戦略について」、齊藤支局長からは「クルーズに係る動向を踏まえた北海道における振興戦略について」のご発言をいただきました。

最後に、古屋コーディネーターから「基調講演及びパネラーの発言と地域活性化の観点を踏まえ、機会があれば道民自らクルーズ体験をすることが大事、各船社への取組（ポートセールス）をすぐ明日から始めること、各地域・機関がそれぞれその役割を果たしていくことが求められる。」と述べられ、シンポジウムが終了しました。

なお、12月11日から動画をHPにて公開しています。



全体風景

NEWS 港湾ニュース

■ 香深港耐震強化岸壁の完成について

稚内開発建設部 築港課

香深港は、礼文島の玄関口として稚内や利尻島とフェリー航路で結ばれており、生活物資を輸送する拠点であるとともに、地域の基幹産業である水産業、観光業などを支える拠点として重要な役割を担っています。



しかしながら、礼文島には大規模地震に耐えられる岸壁が整備されていないことから、災害発生時に被災された方の救助や緊急物資の輸送など、災害時における海上からの輸送が大きな課題となっていました。

そこで、稚内開発建設部は、平成14年度から11年の歳月をかけ、大規模地震発生時にフェリー輸送や緊急物資輸送を可能とする耐震強化岸壁の整備を進めてきました。また、礼文町では、耐震強化岸壁の背後に防災緑地を整備し、耐震強化岸壁とあわせて、災害時に被災者の救助や緊急物資の輸送を可能としました。



この度、耐震強化岸壁が完成したことにより、平成26年6月14日に礼文町民活動総合センター「ピスカ21」において、

礼文町と稚内開発建設部の主催により供用式典を開催しました。武部新衆議院議員(代理:秘書 鈴木昭彦)、三好雅北海道議会議員のほか、工藤広稚内市長、保野洋一利尻町長、田村祥三利尻富士町長など、地元関係者約60名が出席し耐震強化岸壁の完成を祝いました。

供用式典では、主催者の式辞に引き続き、北海道局長の代読として深海港政課長は、「供用開始する水深6メートルの耐震強化岸壁は、大規模地震が発生した場合に緊急物資や機材等の迅速な受け入れが可能となるものであり、被災時に果たす役割は非常に大きい」と述べられました。

続いて来賓の祝辞として武部新衆議院議員から代読

にて「香深港が、島民皆様にとって生活を支える頼もしい拠点として、観光客を迎えるあたたかい玄関口として、ますます礼文島の発展に貢献」と述べられました。また、三好雅北海道議会議員が「3500トン級のフェリーが利用できるようになるなど、地域の基幹産業である水産業、観光業などの振興にも貢献するもの」と挨拶されました。

また、前衆議院議員 元農林水産大臣 武部勤様からお祝いのメッセージが寄せられ「礼文島を愛する人々の安全・安心を守っていただき礼文島の生活と産業の振興に貢献する港として繁栄されんことを切にお祈り申し上げます」と紹介されました。

その後、工事概要報告、地元の保育園児らとともにテープカットを行い、耐震強化岸壁の供用開始を出席された皆様と祝いました。



式典終了後に会場を耐震強化岸壁に移し、礼文町主催による防災訓練が行われました。防災訓練は、第一管区海上保安本部の巡視船「れぶん」と消防車を使った放水訓練や島民参加による避難訓練など実践的な訓練が行われました。

完成した耐震強化岸壁は、礼文町で整備した防災緑地と一体となって、災害時には被災者の救助や緊急物資の輸送に、また平常時には物流を担うことで、礼文島の皆様の安全・安心の確保や産業の振興に貢献するものと期待しております。



■ 第4回小樽港フィールド・ラーニングの開催について

北海道開発局 小樽開発建設部 小樽港湾事務所

平成26年10月1日(水)、小樽開発建設部において、開発局職員約40名が参加し、第4回小樽港フィールド・ラーニング(以下、O.F.L)が開催されました。

O.F.Lは、小樽築港開始時の計画、調査、設計、施工を始め我が国初の近代築港の計画、築造における廣井勇博士(初代小樽港湾事務所長)の工学の考え方を学ぶことは、港湾技術者としての意識・技術・知識、港湾を含む社会資本整備の計画・説明力等の向上に効果的であり、小樽港(Otaru)で実物を見ながら(Field)習得(Learning)する意義は大きいと考え、開催しています。

平成23年度に第1回目を開催し、今年度で第4回目の開催となります。(開催趣旨については、第1回O.F.L開催報告(港のたより Vol.100)を参照願います。)



講演の様子

今回は、「北海道開発土木研究所月報(2005)特別寄稿 シリーズ港湾技術の創世記に学ぶ～廣井勇に学ぶ OTARU ゼミナールの活動より～」論文No6「小樽港北防波堤構造の秘密」の執筆者である株式会社西村組執行役員常務札幌支店長である中村弘之氏を講師に迎え、「小樽築港の検証」と題してお話を伺いました。

講演では、1世紀以上に亘って存在している小樽港北防波堤について、その各構造断面(甲部、乙部、丙部)で用いられている築設の技術を検証し、その姿から、「日本近代港湾建設の父」といわれる廣井勇博士の未来を見据えた技術と設計の確かさの証を学びました。総延長1,289mに達する小樽港北防波堤について、その構造、堤体の一体化に関する技術及び堤頭部の施工方法等を詳細な現地調査や発掘調査により解明し、報告されています。



事務所前の斜塊を見学

講演の後には、北防波堤の断面構造、使用材料及び施工手順などの詳細や事務所前に展示されている斜塊の由来などについて、活発な意見交換が行われました。

また、翌日には、講演参加者が北防波堤及び小樽港湾事務所資料コーナー等において、実際の構造物を見学して、講演内容の理解を深めています。

なお、今回の講演内容については、その元となった廣井勇工学博士研究会の成果が(一社)寒地港湾技術研究センターにて取りまとめられており、報告書は寒地港湾技術研究センターでの閲覧が可能となっています。

最後に、本O.F.Lは、今後も、継続して開催していく予定ですので、多数の方々のご協力をお願いします。



■ 第11回「みなと座談会」の開催

NPO 法人北海道みなとの文化振興機構

10月28日（火）29日（水）の2日間、釧路市で「みなと座談会」を開催しました。

北海道みなとまちづくり女性ネットワークの協力を得て、みなとを核としたまちづくりを女性の視点から考え、実際の活動を通じた意見交換の場として、平成16年から毎年開催しており、今年で11回目となります。

28日は、はじめに数土釧路開発建設部長からご挨拶をいただき、続いて特別講演の釧路国際交流ボランティアの会副会長佐藤洋子様、事務局長盛合美智子様から釧路を取り巻く環境変化に対応したボランティア活動の有り様など貴重な活動体験のご紹介をいただきました。

今年の座談会は、「女性の活躍によるみなとまちづくり」と題し、苫小牧、室蘭、函館、留萌、稚内、紋別の全道6地区から女性ネットワーク各地区会員代表による本年度の活動内容の報告があり、その後、意見交換を行いました。“活動を支える会員の担い手が少ない、会員の高齢化更に資金不足”など活動経験に基づ

き多くの課題が揚げられました。翌29日は、釧路港湾事務所所属の港湾業務艇に乗船し、東港地区を海から見学しました。各港湾施設の説明を受けて、釧路港が北海道の農畜産業等を支える港湾とし、新たに大きく飛躍を遂げようと歩んでいることが見てとれました。

多忙な折座談会に出席いただいた北海道開発局、釧路市など行政の皆様や女性ネットワーク会員の皆様、みなと座談会開催に向けご協力いただいた皆様に厚く御礼を申し上げます。



■ 「北海道海洋深層水フェア」の開催について

北海道海洋深層水取水地連絡会／（一社）寒地港湾技術研究センター

北海道にある海洋深層水の取水施設は、岩内町・八雲町（熊石地区）・羅臼町の3町で整備され、海洋深層水の事業に各々取り組んでいます。

しかし、一般的には海洋深層水の認知度はまだ高くなく、海洋深層水そのものの認知度を上げること及び北海道の海洋深層水を使った商品を一般消費者にPRすることにより、海洋深層水の利用拡大を図り、地域貢献に寄与することを目的に「北海道海洋深層水フェア」を、平成26年10月11日（土）10:00～16:00、札幌駅前通地下広場「憩いの空間」（W1～W3）において開催しました。

フェアは、岩内町・八雲町・羅臼町の3町（北海道海洋深層水取水地連絡会）と当センターとの共催で、

NPO 法人北海道みなとの文化振興機構の協賛をいただいで開催し、本年度で4回目となります。

当日は、連休の初日で、多くの家族連れや旅行者が足を止め、3町自慢の商品をご覧になりお買い求めいただきました。毎年、売れ筋の違うところが難しいところですが、今年は3町で36品目の物販品と11品目の試食品が出展され、初めて海洋深層水を使用して育てた野菜（馬鈴薯・カボチャ）も並びました。野菜については纏まった数量の地方発送を希望される方がいることから、来年に向けた生産者との調整が必要なこと等、今後に向けた課題の整理をアンケート結果とともに行っていきます。



■ 「港湾空港技術特別講演会 in 札幌 2014」 の開催について

北海道開発局 港湾空港部 港湾建設課

平成 26 年 10 月 27 日、北海道開発局(以下、開発局)、国土技術政策総合研究所(以下、国総研)、(独)港湾空港技術研究所(以下、港空研)および(独)寒地土木研究所(以下、寒地土研)の共催による「港湾空港技術特別講演会 in 札幌 2014」をTKP札幌駅カンファレンスセンターにて開催しました。

本講演会は、北海道の港湾空港技術者の技術力向上の取組の一環として毎年開催しており、今年で9回目を数えます。

冒頭、開催にあたり、開発局の川合港湾空港部長から「北海道の港湾構造物の老朽化が進んでおり、非常に大きな課題となっている。今後は予防保全、維持管理に配慮した港湾構造物の設計に取り組まなければならない。」とした上で、100年を経ても機能を発揮している小樽港北防波堤を例に挙げ、「本講演会を契機として、廣井博士の精神を受け継ぎ、関係者の皆さんの技術力を結集して取り組んで欲しい。」と挨拶がありました。

はじめに、港空研構造研究チームの加藤チームリーダーから「維持管理に配慮した港湾構造物の設計について」と題して、維持管理の負担を軽減する設計事例として「消波ブロック被覆堤ケーソン側壁の消波ブロックに対する耐衝撃設計」や「栈橋上部工の耐久性向上技術」について説明がありました。

港空研耐波研究チームの鈴木チームリーダーからは「洗掘と吸い出しは何故起きるか?」と題して、全国各地の被災事例や再現実験の結果をもとにした洗掘・吸い出しのメカニズムの解説がありました。護岸の吸い出し問題について、防砂シートの破れ、ボイリングによる破壊、目地材の破損などの原因にふれ、波の作用を受ける目地の設計の重要性の説明がありました。

港空研地盤研究領域の渡部領域長からは「地盤定数設定法の裏話」というテーマで、平成19年港湾基準改訂時に地盤定数設定法を検討した背景・経緯とその裏話について講演いただきました。講演の結びには、実際に地盤調査データを扱う際には、「経験に基づいた土質力学的なノウハウを切り離して統計処理だけに頼ることは現実的ではない」と、地盤工学の知識・経験を生かすことの重要性を説いていました。

国総研港湾施設研究室の宮田室長からは、「大規模



講演会の様子

地震時における港湾施設(係留施設)の被害程度推定手法について」と題して、係留施設(重力式・矢板式)の地震時被害程度や施設被害に伴う復旧工費・工期の推定手法の講演がありました。この講演は最新の研究成果であり、実被災事例の検証解析の結果及びモデル港湾の試算結果から提案手法の有用性が示されました。

最後に、寒地土研寒冷沿岸域チームの山本上席研究員から、「セルラブロックを用いた新たな防波堤整備工法の開発」と題して、開発の背景、構造検討時の工夫、暫定断面の安定性検討のために実施した模型実験など、開発に係る一連の説明がありました。

当日は、建設会社、コンサルタント会社、港湾管理者、開発局職員など約150名の参加をいただきました。

会場では、熱心に聞き入る姿や、最新の情報に対して活発な質疑がなされるなど、参加者の関心の高さが窺えました。また、講演会後の意見交換会では、研究者と講演会参加との間で、現場での課題など、活発な意見交換がなされておりました。

最後に、講演をいただいた研究者の方々、ご多忙の中、講演会に参加をいただきました皆様へのお礼に代え、報告とさせていただきます。

■ 平成 26 年度国土交通省「国土技術研究会」 について

北海道開発局 港湾空港部 港湾建設課 水島 良

国土交通省「国土技術研究会」は、国土交通省所管の社会資本整備行政に係る技術課題、中長期的又は緊急的に取り組むべき技術課題等について、技術の向上と行政への反映を図ることを目的として毎年開催されており、本省、地方整備局、北海道開発局、地方航空局、試験研究機関等が発表を行い、議論が重ねられます。

平成 26 年度は、11 月 5 日、6 日の両日に霞ヶ関の中央合同庁舎 2 号館において開催されました。

5 日（水）は、自由課題を中心に 57 課題の報告（北海道関係は 6 課題）が行われ、様々な土木技術の紹介とともに、各種災害（地震・水害・高潮等）時の対応から得られた新たな知見について報告がありました。

私は「段階施工を可能とする防波堤整備工法について～連結セルラブロック工法の開発～」について、北海道開発局の代表として発表してきました。

施工規模が小さい場合にケーソン工法より効率的に整備を行えることや、予算に応じた柔軟な防波堤延伸が可能なことなど、連結セルラブロックの特徴を中心に発表を行いました。会場から第一線防波堤への適用や、コストの算定について質問があり、参加者の興味をひいていました。

6 日（木）は、午前中に自由課題のアカウントビリティ部門と指定課題についての発表がありました。

アカウントビリティ部門では、発表者 5 名がそれぞれのテーマで順次発表した後に、公共事業のアカウントビリティに関して、発表者 5 名と審査員 3 名によるグループディスカッションを行う形式で進められました。広報活動において、一般的に PR 写真は大型構造物や建設機械等に偏りがちですが、工事に係わってきた職人達の顔が見える作業風景を「工事の軌跡」として紹介する広報活動の事例の発表がありました。同じものづくりを行う立場として、職人を写真に掲載することで、構造物は熟練した技術の積み重ねによって造られることが伝わり、自分も技術力の大切さを改めて認識することができ、非常に興味深い内容でした。

午後からは三陸鉄道株式会社の望月正彦社長による特別講演「三陸鉄道 復旧・復興の取組み」があり、東日本大震災発生時における初動体制や平成 26 年 4 月の全線復旧までの道のりについて紹介されました。

震災発生時は、電力の供給や通信手段が寸断される中、被害を免れたディーゼル車両を災害対策本部とし、衛星電話を使用して情報収集にあたった状況の報告があり、緊急時には柔軟な対応が重要であると感じました。また、復旧工事中で駅舎が使用できない状況でも、地元住民の方々によって駅舎周辺の草刈りなどが行われていたとの報告があり、地元住民の方々の三陸鉄道復旧に対する強い期待感が感じ取られました。

本研究会には、国土交通省職員のほか、自治体やコンサルタント会社の職員等も参加し、各地方整備局等の取組に対して活発な質疑がなされ、参加者の関心の高さが窺えました。

また、本研究会への参加により、簡易橋梁点検システムの開発や全国初のサンドパック工法による海岸浸食対策など、港湾分野以外の発表も聴講でき、新たな技術開発へのモチベーションも向上し、とても有意義な 2 日間となりました。

最後になりますが、今回私が発表しました連結セルラブロック工法の開発に携われたの方々に対して、この場を借りて感謝申し上げたいと思います。



研究会での報告の様子（筆者）

■ みなと講演会(紋別)開催のご報告

NPO 法人マリンネットワーク理事長 古屋温美

1. 講演会

みなとオアシス「もんべつ」は、平成26年1月24日、道内で8番目のみなとオアシスとして登録され、流水観光砕氷船「ガリンコ号Ⅱ」の発着場でもある「海洋交流館」を中心とし、周辺に位置する世界初の氷海展望塔「オホーツクタワー」や親水防波堤である第3防波堤「クリオネプロムナード」等のみなとの資産を活用した交流拠点づくりが推進されています。

一方、紋別では、これまで流水観光を核として観光振興に取り組んでいるものの、さらなる観光振興のためには、みなとオアシスエリア及び中心市街地等がより一層連携し、紋別港・紋別地域が持つ地域資源を最大限活用しつつ、みなとオアシス「もんべつ」の魅力向上を図っていく必要があり、今回の講演会は、みなとオアシス「もんべつ」のさらなる魅力向上に向けて、平成26年10月25日(土)16:00~18:35、紋別市ホテルオホーツクパレスにて、約250名にお集まり頂き開催されました。なお、講演会の主催は、みなとオアシス「もんべつ」運営協議会、一般社団法人寒地港湾技術研究センター、NPO法人マリンネットワークです。

(1) 特別講演「オホーツクから北海道を新に」

衆議院議員 武部 新氏

以下に発言要旨をまとめました。

- ・それぞれの地域にはそれぞれの自然に合った生活がある。
- ・みなとを中心としたまちづくりは、新たな段階に入っており、みなとオアシスはそのひとつである。海の近くに住んでいる我々には重要なことである。
- ・増田レポート(増田寛也(元総務相・岩手県知事)が日本創世会議・人口減少問題検討分科会の議長となつてとりまとめた報告)によると日本の人口減少対策は待ったなしの状況であり、定住化を進めていかなければならない。雇用をさせる産業の推進、住む環境(病院、教育)を整え若い世代が安心して暮らせる社会が必要。
- ・交流人口を増やす方法として、外国人の受入体制を考える。レンタカーや自転車で回る台湾外国人が増加している。交通標識を多言語化していく必要。
- ・台湾では「北海道」というブランド力があり、それ

を効果的に使うことが重要。

- ・サハリンは北海道に魅力を感じており、紋別を特別区にしてロシア観光客を受け入れるなど、地元から大きな提案をしたらよい。
- ・紋別のように港湾も空港もあるまちは少ない。地方都市のグローバル化が重要。オホーツク海にはメタンハイドレードがあるとされており、エネルギー供給基地となる可能性がある。
- ・まちを元気にするためには人材が最も重要であり、リーダーを育成していかなければならない。



衆議院議員 武部 新氏

(2) 講演「みなとまちの賑わい」

国土交通省港湾局産業港湾課長 高田 昌行氏

「ないものねだり」から「あるもの探し」へというメッセージを盛り込みながら、海からアプローチした紋別港のポテンシャルについて触れつつ、高田課長ご自身がこれまで見てこられた全国のみなとオアシスの事例紹介、クルーズ100万人時代に向けたクルーズ振興に関する紹介等をいただきました。最後に、みなとまちは今後、地域資源やみなとの既存ストックを活用し、市民の参画と行政や民間企業等との連携をすすめ、雇



国土交通省港湾局産業港湾課長 高田氏

用と所得の創出による地域振興を図ることができるというご提案をいただきました。

(3) パネルディスカッション

高田課長の講演をヒントに、「紋別港を活用した地域活性化を考える」というテーマで、以下のメンバーで意見交換をしました。

【パネリスト】

紋別市長	宮川良一 氏
紋別漁業協同組合女性部長	渡辺玲子 氏
一般社団法人紋別観光協会会長	出塚容啓 氏
みなとオアシス「もんべつ」運営協議会代表	竹内珠己 氏
オホーツク・ガリンコタワー(株)常務取締役	加藤公之 氏

【アドバイザー】

国土交通省北海道開発局港湾空港部 港湾計画課長	中島 靖 氏
----------------------------	--------

【コーディネーター】

NPO 法人マリネットワーカー理事	遠藤仁彦 氏
-------------------	--------

パネリストからは、来年の宮古開催のSea級グルメに紋別から参加する旨の宣言が出されるとともに、意見交換の中で、クルーズの誘致、北海道みなとオアシスマルシェ（仮称）等を取り組んでいくことが確認されました。

休日にもかかわらず、参加してくださいました皆様、講演会の実施にあたりご協力くださった関係者の皆様へ、紙面を借りて御礼申し上げます。



パネリスト（左から、宮川氏、渡辺氏、出塚氏、竹内氏、加藤氏）



コーディネーター 遠藤氏（左） アドバイザー 中島氏



閉会挨拶
一般社団法人寒地港湾技術研究センター会長 佐伯浩氏

